

手仕事教育を考える

○前原祥子
(武蔵野女大短大)

目的 近年レポート等の学生の字があまりにも稚拙で、同じような癖のある字が増加してきたので、学生が書いている所を観察し、鉛筆の持ち方がおかしいということに気がついた。数年の観察の後、ますます増加しているように感じたので、我が短大生活学科の学生にアンケートを行い、目白大の谷田貝先生を中心とした小・中・高生の手さばき・手仕事のアンケートをも参照してみると、我々が教えている生活学科の和裁の運針とも関連しているのではないかと思い、調べて見ることにした。

方法 平成8年、9年生活学科の学生約1200名に、手仕事は好きか、お箸を正しく使うことが出来るか、鉛筆を正しく使うことが出来るか、実習では何をやりたいか、将来どんな手仕事をやりたいか等のアンケートを行い、谷田貝氏らのアンケートと突き合わせて、運針との関連を検討した。

結果 運針が年々出来なくなっているのは、縫物の経験不足もあるが、お箸の持ち方→鉛筆の持ち方→運針の線上にある“手わざ”にあることがわかった。これは家庭での親の躰の低下、学校での教育—特に勉強の点数至上主義で、鉛筆の持ち方はどうでもよく、又手わざの軽視にあるのではないかという所にゆきついた。縫物(ゆかた)を縫わせることにより、クリエイティブな喜び、根気を養う、自分に対する自信などの教育的効果があり、又人生80年の時代第二の脳と言われる手を、生活学科の他の造形実習でも、さらに考えてみたい。